

棘皮(きょくひ)動物

ウニやヒトデ、ナマコのなかまです。体は中心から5方向に放射状に伸びたつくりをしており、表面はトゲでおおわれています。すべての種が海の中に生息しています。

トゲモミジガイ

(西)

本州中部以南の浅場の砂泥底に生息しています。

背側は暗褐色で、体の縁全体に大きなトゲをもっており、砂をけるようにして移動します。

体内にフグと同じ毒を持っているため、食べると中毒を起こします。



イトマキヒトデ

(東)(西)

北海道から九州までの浅場の岩礁や砂底で多くみられます。

背側は青色や暗青色で、赤色やオレンジ色の不規則な斑紋がみられます。まれに背側全体がオレンジ色の個体もみられます。



キヒトデ

(西)

北海道から九州までの水深5~20mの岩礁や砂底でみられます。

背側は黄色で紫色の斑紋があり、太くて短いトゲでおおわれています。

全体が黄色、または紫色の個体も見られます。



サンショウウニ

(東)

殻が4cm程度のウニで、トゲはオリブ色で、短くとがっています。

生殖巣にサポニンという成分を含んでおり、辛みやえぐみがあるため、一般的には食用になりません。



マナマコ

(東)(西)

北海道から九州の浅場の転石帯に生息しています。外洋性の岩礁などに生息する個体は赤と褐色の斑紋があり、内湾の砂泥底に生息する個体は青緑色や黒色をしています。

食用とされており、生食のほか「いりこ」や「このわた」として用いられています。



原索(げんさく)動物

ホヤやナメクジウオのなかまです。

一生あるいは幼生期に脊索(せきさく)を持つ動物で、浮遊して生活するものや固着して生活するものなど、さまざまなタイプの種がいます。

シロボヤ

(東)(西)

陸奥湾以南の日本海側と房総半島から鹿児島湾までの太平洋側の潮間帯下部に生息しており、内湾の汚れたところで多くみられます。

細長い楕円形で、後端で岩などに付着しています。



脊椎(せきつい)動物

体の中軸に脊椎をもつ動物で、魚類、両生類、鳥類、爬虫類、ほ乳類に分けられます。ヒトも脊椎動物の1種です。生きもの調査では魚類だけを調べました。

ボラ

東

北海道以南の沿岸で多くみられます。東京湾の内湾では最も優占する遊泳魚で、大型な個体は年間を通してみられます。

卵巣の塩漬けを乾燥させたものは「カラスミ」として知られています。



カサゴ

東 西

北海道南部以南の沿岸の岩礁域に生息しており、小さな甲殻類や魚類などを食べます。

磯釣りの対象魚として、人気があります。



メバル属の一種

東 西

北海道南部から九州までの沿岸の岩礁域に生息しています。

メバル属は生息する環境などにより体色の変異が大きいことが知られており、2008年にアカメバル、クロメバル、シロメバルとして区別されました。



スズキ

西

北海道南部以南の沿岸域に生息しています。

東京湾では砂浜海岸や護岸の周辺、岩礁域など様々な場所で多くみられます。

江戸前を代表する食用魚で、現在でも豊漁が続いています。



クロダイ

東 西

北海道以南の琉球列島を除く日本各地の沿岸に生息しています。

雑食性で小型の甲殻類や貝類、海藻などを食べます。

磯釣りの対象魚として親しまれています。



メジナ

東 西

北海道南部以南の湾奥から外湾にかけての岩礁域や漁港などで多くみられます。

クロダイと同様、磯釣りの対象魚として人気があります。



ヒメハゼ

東 西

全国の内湾や河口の砂泥底に生息しています。

小型の甲殻類や二枚貝を食べており、危険を察知すると砂に潜ります。

体に2個が一組となった暗色の斑点が4組あります。



キララハゼ属の一種 東 西

沿岸の砂泥底に生息しています。
体に複数の暗色縦線をもち、小さな青色の斑点が散在しています。かつては「スジハゼ」とされていましたが、近年スジハゼ、ツマグロスジハゼ、モヨウハゼの3種類に分けられました。



アミメハギ 東

青森県以南の水深20m以浅の岩礁域や藻場で多くみられます。
東京湾では湾中央から外湾にかけての岩礁域やアマモ場などで夏から秋に稚魚がみられます。



カワハギ 東

北海道以南の水深100m以浅の砂地に生息しており、小型の甲殻類や貝類、ゴカイ類などを食べます。
釣りの対象魚として人気があります。



クサフグ 東

青森県以南の内湾の岩礁域や藻場、砂底域に生息しています。
漁港などでよく釣れますが、内臓や皮膚などに毒があるので食用にはされません。
砂に潜る習性があります。



動物プランクトン・植物プランクトン

プランクトンとは遊泳力をもたない浮遊生物の総称で、「植物プランクトン」と「動物プランクトン」に分けられます。植物プランクトンは陸上の草木と同様に光合成を行い、自ら栄養を生産できます。一方、動物プランクトンは光合成ができず、植物プランクトンを食べることで成長します。エビやカニの幼生、クラゲなども動物プランクトンに分けられます。

植物プランクトン



スケルトネマ
コスタータム
(*Skeletonema
costatum*)

日本全国の海や河口でよくみられます。



レプトキリンドルス
ミニマス
(*Leptocylindrus
minimus*)

日本全国の海に広く分布し、春から秋にかけて多くみられます。



タラシオシーラ属
の一種
(*Thalassiosira* sp.)

糸でつながったような群体を作ります。

動物プランクトン



オイトナダビスエ
(*Oithona davisae*)

日本全国の海でよくみられます。



オオピンガタカラムシ
(*Favella ehrenbergii*)

沿岸域によくみられ、ラッパのような形をしています。



ソコミジンコ目
の一種
(*Harpacticoida*)

海産の種が多く、ほとんどが底生性です。

海藻

海や汽水域に生育し肉眼で見ることができる多細胞の藻類です。色の違いによって緑色植物・黄色植物・紅色植物という3つの門に分けられていますが、種や状態、地域などによって変化に富んでいます。

アオサ属の一種

東

緑色植物に分けられ、体の細胞は2層であるのが特徴です。東京湾では、ボタンアオサ、アナアオサ、ミナミアオサなどがみられます。

味噌汁などに入っている「アオサ」はアオサ属ではなく、ほとんどがヒトエグサ属です。



ミル

東

体は円柱状で規則正しく枝分かれし、フェルトのような手触りが特徴です。漢字では「海松」と書きます。体は「小のう」という小さい細胞からできています。古来から食用として用いられ、朝廷や伊勢神宮などに献納されていました。



オゴノリ属の一種

東

紅色植物に分類され、体は細い円柱状です。東京湾では、ベニオゴノリなどがみられます。

湯通しで緑色になったものは、刺身のつまとして利用されることがあります。



身の周りにある海藻を探してみよう

海藻はワカメや昆布をはじめ、様々な食品に利用されています。ここでは私たちの身の周りにある海藻を紹介します。



上の写真は食事によく目にする海藻の一例ですが、どれも一度は目にしたことがあるのではないのでしょうか。

青のり：お好み焼きなどにかけて食べられています。スジアオノリやアオサ類が使われています。

わかめ：味噌汁などに入れられる海藻です。めかぶはワカメの胞子葉という葉の一部が使われます。

モズク：オキナワモズクやイシモズクが使われ、スープの具材や酢の物などによく利用されます。

ヒジキ：煮物でよく使われています。私たちが食べるヒジキは乾燥させた黒色のものですが、乾燥前の生きている時は茶色や緑色をしています。

昆布：おにぎりの具をはじめ、だしなど様々な料理に使われています。

のり：東京湾では江戸時代からアサクサノリというのりが養殖されていましたが、現在はスサビノリに代わっています。昆布と同様に幅広く料理に使われます。

海の生きものの 赤ちゃんたちをみてみよう！

プランクトン調査で採取された海の生きものの赤ちゃんたちを紹介します。



二枚貝の浮遊幼生

二枚貝は卵から生まれたあと、数週間海中を浮遊しています。その後干潟などに着地し、底生生活をおくります。



エビ類のソエア幼生



甲殻類のノープリウス幼生

エビ類やカニ類などの甲殻類に共通する初期の幼生です。ノープリウス幼生の時期を経た後、ソエア幼生になります。



多毛類の幼生

環形動物のなかまである多毛類は、幼生の時は長細い形ではなく、丸い形をしています。幼生の間は水中を活発に泳いでいます。

大きくなった時と姿が全然違うね！



多毛類（ゴカイ科）の成長

